慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	修験道における宗教儀礼の構造
Sub Title	The structure of religious rite in shugendo (excertis from doctoral dissertations)
Author	宮家, 準(Miyake, Hitoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1969
Jtitle	哲學 No.54 (1969. 11) ,p.235- 245
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	博士論文抜萃
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000054-0235

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

修験道における宗教儀礼の構造

宮家　準
Miyake Hitoshi

1. 研究対象と研究方法

修験道は我国古来の山に関する信仰が，仏教，道教，儒教など外来諸宗教の影響のもとに，中古末にいたり，特定の宗教体系を形作り，現在に及んでいるものである．この宗教は，主として山岳で修行することにより超自然的な霊力を得た修験者が，地域社会において人々の宗教的希求に応じて，呪術宗教的活動を行なうことを中核としている．

修験者は中世においては山野を跋渉遊行したが，近世以降は徳川幕府の政策もあって，地域社会に定住した．けれども近世初頭には，すでに地域社会の神社は守護神を鎮守し，寺院は葬祭をあづかっていた．こうした社会に入り込んだ修験者は，庶民の治病や生活上の諸問題などの希求に応じて，卜占，巫術，祈祷，調伏などの宗教的活動を行なった．

こうして近世においては，修験者は庶民の宗教生活の所謂現世利益的側面を担当して，その宗教的活動の主要な分野としていたのである．さらにまた近世末以降相次いで発生した諸宗教（例えば教派神道）の多くのものは，その宗教的活動の原型を主として修験道によっていると云われている．

こうしたことから考えて見ても，日本の庶民宗教は，修験道ぬきには理解し得ない．その所為もあって，修験道研究の必要性は，単に宗教学の分野においてのみでなく，歴史学，民俗学等の分野からも注目され，従来も若干の研究は行なわれている．

しかしながら，従来の修験道研究は，概括的なものの他は，教団史とか，入峰修行などの部分的研究の範囲にとどまり，修験道における祭，卜占，巫術，祈祷，加持，調伏，符呪などの諸儀礼に関する包括的研究は全くこころみられていない．これらは，修験者が庶民の生活上の希求に応えて行なう宗教儀礼であり，庶民宗教としての修験道把握の鍵をなすものである．ことに，一つの宗教体系として修験道を研究する為には，これらの宗教儀礼の全体的関連を把握することがもっとも重要な課題となる．けれどもこれらの諸儀礼は，資料が祕伝とされていることが多かったり，研究方法がつかめぬために，従来研究がなされないままに放置されていた．

本論文は，上記の諸儀礼の実施方法を記した諸資料を，次の立場から現地調査にもとづいて，分析解明し，修験道儀礼の象徴的意味を全体的に把握したものである．

まず，修験道の宗教儀礼として，入峰修行，正灌頂，験術，供養法，神祭，日月星の祭，小祀の祭，卜占，巫術，憑祈祷，息災護摩．諸尊法．加持．憑きものおとし，調伏，符呪，まじないをとりあげ，各項の儀礼を修験道の全儀礼体系と有機的連関を持つ単位儀礼として設定する．そして修験道儀礼の構造を次のように把握する．

各単位儀礼は基本的には，いずれも特定の宗教的世界観を象徴する symbol system であると考える．すなわち，単位儀礼中の個々の行為は symbolic action であり，種々の装置その他はそれぞれ symbol である．そしてこれら多数の symbolic-action や symbol が結合して，特定の宗教的世界観を象徴する symbol system をなしているのが単位儀礼なのである．

すなわち，修験道の宗教儀礼の symbol system は，修験者の宗教的世界観が，修験者自身が行なう行為の形をとって示されているものなのである．その際 symbol system としての儀礼には，system といわれるからにはモチイフ——主題——となる原理がなければならない．この原理の基

調をなすのは，修験道の宗教的世界観である．修験道の symbol system は，勿論実生活との連関をもつものであるが，修験道儀礼をも含めて宗教儀礼は第一次的にはそれの基底にある宗教的世界観との関係に立って分析すべきであると考える．さらに可逆的には宗教儀礼と対応させて宗教的世界観を分析，解明することによって，従来の宗教的世界観研究のように抽象に走ったり，自己撞着におちいることなく，それを動態的に把握することができよう．

このことをよりくわしく述べてみよう，個々の単位儀礼は，宗教的世界観を象徴するために，宗教的世界観の中でその儀礼機能に適切であり，しかも修験者や信者の生活に身近かなモチイフを中心とする symbol system を構成している．そして数個の symbolic action や symbol のセットが，その symbol system の構成要素をなしている．さらに単位儀礼の諸構成要素は，構成要素中モチイフに適した中心的なものを中核にして，相互に関連を持って結びつき一つのまとまったメカニズムをなしている．

上記の立場にたつ筆者の修験道における単位儀礼の研究は，結局そのメカニズムを宗教的世界観との連関において分析し，それを手がかりとしてモチイフを解明することを目的とする．——そしてさらに可逆的に宗教儀礼の側からモチイフを通して宗教的世界観を再解釈し，位置づけるものである．——筆者はこの目的達成の為に次の操作をこころみた．

まず単位儀礼中の symbol や symbolic action の意味を宗教的世界観との関係において解明する．次にその意味のうち類似のものをまとめ，異質のものを対比することにより，単位儀礼の構成要素を獲得する．その上で諸構成要素の組みあわせの仕方——メカニズム——とその原理となっているモチイフをあきらかにする．さらにこのモチイフを宗教的世界観と関連づけて解明する．上記の操作によって単位儀礼のそれぞれについて分析したものが，第二章から第八章までの論述である．

こうして各単位儀礼のメカニズムを分析し，モチイフを宗教的世界観と

関係づけて解明した上で，次に修験道の全儀礼体系内での諸単位儀礼の相互関係を考える．そしてそれにもとづき，単位儀礼の分析，解明の場合と同様の方法を用いて，修験道の全儀礼体系の構造と機能をとらえ，これらを宗教的世界観との関連で解釈する．(第一章　研究対象と研究方法)

2. 諸修験道儀礼の構造

次に諸単位儀礼の構造をそのモチイフ及び構成要素のうち中核をなしているものに焦点をおいて示し，あわせてそれを宗教的世界観にてらして解明する．

まず入峰修行と正灌頂は，修験者が山岳修行をし，秘印の伝授をうける(正灌頂)ことによって，本尊不動明王と霊能的に同化し，その力を行使する能力を体得した仏として再生することを示す儀礼である．それ故この儀礼の構成要素の中心をなしているのは，本尊との同化(identification)をあらわす symbolic action である．なお入峰修行は，山岳を現実の世界とは異った不動明王をはじめとする諸崇拝対象がすむ霊界，または宇宙を象徴するものであるとする宗教的世界観にもとづいているといえよう．(第二章第一節　修験道の入峰修行．第二節　修験道の正灌頂)

験術は，修験者が不動明王と同化の symbolic action ののち霊界に入って行くことを顕示 (demonstration) する儀礼であり，これまた同化を中心的構成要素としている．なおこの儀礼の背後には不動明王の姿と化した修験者が，霊界に入って行くことができるというシャマニズム的世界観の存在が予測される．(第二章第三節　修験道の験術)

次に修験者が屢々行なう祭に，供養法，神祭，日月星の祭，小祀の祭の四つのものがある．(第三章　修験道の祭)

このうち供養法の代表的なものである不動法は修験者が不動明王を賓客として修行道場に招き，これとの同化をはかる儀礼であり，読経や神祭は崇拝対象を迎えて供養する儀礼である．それ故前者は同化が，後者は崇拝

対象との交歓 (communication) が中心的な構成要素をなしている.

日月星の祭は，日月星を招いてこれを不動明王と同化させることによって七難即滅，七福即生をはかるものである．他方荒神や地神などを祭る小祀の祭は，修験者が不動明王と同化の上で，障碍のもとになっている邪神をはらい福神を招くことによって除魔をはかっている．それ故広義に解すれば，この二つの儀礼は，いずれも除魔の祈願 (prayer) を中心的な構成要素としているのである．そして両儀礼共に，修験者が不動明王と同化した上で，災厄のもとになる日月星の良くない運行や邪神をはらい正常なものとすることによって福を持たらし得るとの宗教的世界観にのっとっている.

災厄の原因や人間の運勢を知る方法に吉凶と運勢，卜占，巫術等がある．まず吉凶と運勢は，陰陽五行，十干十二支等を論理的にくみたてることによってわり出した大宇宙の一切の動きのうちに小宇宙としての人間を位置づけてその運勢を判じるというモチイフをとっている．なおこの場合でも，日の吉凶は天神，方位の吉凶は御霊神，人間の運勢は星に託する宗教的世界観が認められる．卜占も吉凶と運勢と同様の方法によって病気等の原因を明らかにする儀礼である，なお病気は宇宙の正常な運行が，御霊神，生死霊などによってくるわされる事からおこるとされている．(第四章　修験道における運勢と卜占)

巫術は修験者が守護神霊を自己に憑依させて，託宣を得る儀礼である．なお，いたこ型巫者の口寄せ等の場合は，巫者が守護神霊と同化後，その力を用いて依頼された生死霊を呼び，自己に憑依させる形がとられている．(第五章第一節　修験道の巫術) 一方修験道独自の巫術に憑祈祷がある．これは，不動明王と同化した修験者が主に産生神を操作して憑りましに憑依させて託宣を得る儀礼である．(第五章第二節　修験道の憑祈祷)

息災護摩は不動明王と同化した修験者が，火天，曜宿等を操作して除魔をはかる儀礼である．この場合は災厄の因を曜宿に求め，その厄を焼きつ

くすことによって福を得ることができるという宗教的世界観によって支えられている．(第六章第一節　修験道の息災護摩) 諸尊法では，修験者が崇拝対象との同化を示したのちに，その救済活動を象徴する symbolic action を行なっている．(第七章第二節　修験道の諸尊法) なおこの両者はいずれも祈願を中心的な構成要素としている．これらに対して，加持は崇拝対象の力により，除魔をはかったり，崇拝対象の力を武具，着物等に付与することによって守護を求める儀礼である．(第六章第三節　修験道の加持)．

次に修験者が好んで行なった宗教儀礼に憑きものおとしと調伏がある．前者は修験者が憑依霊を教化してその非を悟らせたり，威嚇しておい出すことによって除魔 (exorcism) をはかる儀礼である．他方後者は修験者が不動明王と同化の上で，不動明王の眷属を使役して，祟っている邪神邪霊をしばりつけて，きる，たたく等して降伏させるものである．なおこの両儀礼は，災厄の原因を邪神邪霊の所為にして，不動明王と同化した修験者が，直接その超自然力を用いたり眷属や童子等を操作 (manipulation) して，この邪神邪霊を制御し得るとの宗教的世界観に立っている．(第七章修験道の憑きものおとしと調伏) これらをより簡単にした儀礼に符呪とまじないがある．この両者は，修験者が崇拝対象の超自然力を付与された符または呪文を操作して除魔をはかるというモチイフの儀礼である．(第八章　修験道の符呪とまじない) このように，憑きものおとし，調伏法，符呪，まじないの四儀礼は，いずれも，除魔 (exorcism) を中心的な構成要素としているものである．

なおこれらから考えて見ると，修験道の諸儀礼は，いちぢるしく巫術的な性格を持っているといえよう．

3.　修験道における儀礼の論理

修験道の諸単位儀礼は，修験道の儀礼体系全体の中で，次のような相互関係をなしている．

修験道儀礼では，修験者はまず入峰修行や正灌頂により，崇拝対象と同化し，その力を行使する能力を体得している．そして験術に見られるように，その能力を一般信者に顕示することも行なう．次に供養法や神まつりによって常に崇拝対象と交歓，同化している．

こうした平素の準備の上で，信者の主として災厄除去の依頼に応えて，卜占，巫術などを行ない，災厄の原因となっている邪霊，邪神，悪星が何であるかを明らかにする．そうしておいて，息災護摩，諸尊法，日月星，小祀の祭によって除災招福を祈る．あるいは調伏法や憑きものおとしにより祟っている邪神邪霊を降伏させたり，憑依霊をおとす．またより手近かな方法としては，加持，符呪，まじない等によってこれらを払う．

筆者は修験道の全儀礼体系を，諸単位儀礼における中心的構成要素からなる体系と把握する，すると修験道儀礼全体は，崇拝対象との同化（入峰修行，正灌頂，不動法）・崇拝対象との交歓（読経，神まつり）・崇拝対象との同化（巫術，憑祈祷，息災護摩，日月星の祭，小祀の祭，加持，憑きものおとし，調伏）・眷属等の操作(憑祈祷，息災護摩，加持，憑きものおとし，調伏，符呪，まじない)・託宣（巫術，憑祈祷）・祈願（息災護摩，諸尊法，日月星の祭，小祀の祭）・除魔(加持，憑きものおとし．調伏，符呪，まじない）の七種の構成要素から成っていると考えられる．そしてこれら構成要素相互の関係をもとにして考えると，修験道儀礼全体の構造は，次のように把握することができる．

修験道儀礼では，修験者はあらかじめ崇拝対象不動明王と霊能的に同化し，その霊力を行使し得る能力を獲得しておかねばならない．そして信者の依頼をうけると，まずうらないによって災厄の原因をあきらかにする．この原因は多くの場合，動物霊，生死霊，邪神等の所為にされている．これらのものの邪悪な活動を止めさせる為の最も一般的な方法は，崇拝対象に祈願をこめるものである．けれども修験道では祈願よりはむしろ，修験者が不動明王と同化した上で，その超自然力や眷属を使役して邪霊，邪神

の邪悪な活動を止めさせるという方法の方が，より広く行なわれている．

以上要約すると，修験道儀礼を上記の方法を用いて分析した結果では，修験道の儀礼体系は，修験者が崇拝対象と同化した上で，(同化 identification) 災厄の原因が邪霊邪神の所為であることを知り，(託宣 oracle) 崇拝対象の超自然力や眷属を使役することにより，(操作 manipulation) それをのぞくことによって災厄を除去する (除魔 exorcism) という構造になっていると考えられる．そしてこの中でも，同化，操作，除魔が修験道の全儀礼体系の中心モチイフをなしているということが出来る．(第九章第一節　修験道儀礼の構造)

ところでこの三つのモチイフは，修験道の宗教的世界観の中から修験道儀礼の機能にもっとも適切なものとして設定されているものである．修験道の特に庶民の現世利益的希求と結びついた宗教儀礼は，顕在的機能としては，庶民の災厄をのぞくこと，すなわち除災の役割をはたしている．そして他方信者に対する潜在的機能としては，修験者の持つ超自然力の顕示や教義の伝達，既存の庶民宗教との習合等をあげることができる．

このうちまず修験道儀礼が，信者に対して除災という顕在的機能をはたすということは，儀礼における除魔のモチイフに反映している．次に修験道儀礼が信者に対して，修験者の超自然力を顕示したり，教義を広めるという潜在的機能は，修験者の不動明王との同化及びその働きを示すモチイフに反映している．そしてこれを特に如実に示すのは，不動明王と同化後霊界に行くことを象徴する験術であろう．また教団によって権威化されている宗教的世界観である教義は，教化文や表白として種々の儀礼で屢々となえられている．

修験道儀礼が庶民の既存の宗教生活と修験道を習合させるのに役立っているということは，修験者が神社や小祀の祭をしていることに見られる．けれども今一つ修験道儀礼のモチイフとの関係で興味深いのは，修験者が崇拝対象と同化した上で操作している眷属が多くの場合地域社会の産生神

の類であるということである．修験者はこれを使役することによって自己の宗教的活動を，彼等が地域社会に定住する以前から地域社会で行なわれていた宗教の中により優位に位置づけることに成功したのである．

このように修験道儀礼の同化，操作，除魔のモチイフは，それぞれ儀礼の機能と密接な関連のもとに定められたものと解釈することができる．(第九章第二節　修験道儀礼の機能)

けれども同時にこのモチイフは，修験道の宗教的世界観を儀礼の形で象徴したものである．そこで最後に修験道儀礼を支えている宗教的世界観を，特に同化，操作，除魔のモチイフに即して再解釈し意味づけて見よう．

まず修験道の儀礼を支えている宇宙観においては，基本的には人間生活とその背後にあってこれを支配している日常的なものをこえ，これを区別される超自然的な霊界の二分法がとられている．そして山岳はこれら両面をあわせ持つ宇宙そのものあるいは霊界であると説明されている．さらに護摩壇などの修法道場，祭の場所もこれに近いところと説明されている．

修験道における超自然的な霊界では，人間生活を支配する多くのシンクレティクな諸神諸仏諸霊が大きな神座 pantheon をなしている．この中核をなすのは不動明王である．そして不動明王を中心とする霊界の居住者は三種類のものに類別できる．第一は不動明王，大日如来など密教の諸仏諸尊，蔵王権現など修験道独自の崇拝対象，全国的な神社の神など普遍的な性格を持つ神格である．なおこれらの普遍的神格は宇宙そのものを象徴することも多い．第二は地主神，護法，眷属等個別的な性格を持つ神格である．この第二のものは第一のものの眷属の位置を占めることが多い．もっとも蔵王権現や全国的な神社の神などのように第二の類型であったものが第一の類型となったものもある．第三は実際に災厄などの原因となっている邪神邪霊である．なお邪神邪霊なども，修験者によって小祠などに祭りこめられると，第二の類型の神格になり得る．

ところで，修験道では，人間は宇宙の構成物であり，小宇宙としての性

格をもつとされている．さらに人間を含む一切のものは，本来第一の類型の神格と同じ性質を持ち，これになりうるものとされている．それ故，修験者は宇宙そのもの，あるいは超自然的な霊界を象徴する山岳に入って修行をつみ，祕法を受ければ，不動明王などの普遍的な性格を持つ神格と霊能的に同化し得る．さきに記した修験道儀礼の構造をふり返って見ると，修験者は，何よりもまず，入峰修行や正灌頂により，不動明王と同化し，その霊力を行使し得る能力を得ることが要請されている．こうした霊力を獲得した修験者は，地主神や護法神など，信者の生活に対して特に密接な関係を持つと信じられている個別的な神格に災厄の原因をききこれが邪神邪霊の所為であることをあきらかにする．その上で修験者は，普遍的神格の力を用いたり，個別的神格を使役して，邪神邪霊を制御して除魔をはかるのである．

このように修験道儀礼の同化，操作，除魔のモチイフは，次の宗教的世界観を基礎にして，儀礼機能との関連のもとに定められたものと解することが出来る．まず第一に宇宙そのものを現実の人間生活とその背後にあってこれを支配する日常的なものをこえこれと区別される霊界に二分する考え方が存在する．第二に霊界にはシンクレティクな諸仏諸神等が神座をなしているが，これらのものは普遍的神格，個別的神格，邪神邪霊の三つに分けられる．第三に修験者は宇宙そのものまたは霊界を象徴するとされている山岳等で修行をつめば，普遍的神格と霊能に同化し，直接その力を用いたり，個別的神格を使役して邪神邪霊を統制して除魔をはかり得る．こうした宗教的世界観が修験道儀の中に象徴されているのである．以上のことから考えて見て，修験道儀礼の基本的性格はその宗教的世界観が示す範囲内ではシンクレティクであって，その本質的特質には巫術的なものがあるといえよう．(第十章　修験道儀礼の構造と宗教的世界観)

付記　本稿は，学位請求論文，「修験道における宗教儀礼の構造」の梗概として

昭和43年3月に提出したものを其後の調査研究にもとづいて，加筆，修正しさらに全体の構成も一部変更したものである．梗概執筆にあたっては，特に研究方法と結論に重点をおき，単位儀礼の分析等は一切割愛した．詳細は，近日刊行の拙著(「修験道の研究——儀礼篇」春秋社，昭和45年3月刊行予定)をお読みいただければ幸である．

(昭和44年10月13日)